

はねっこ残照

昭和の時代を彷彿させる「盆踊り」。懐かしい匂いでもしてきそうなセピア色の光景とともに思い出がひろがります。

お盆の頃に神社の境内や広場や小学校の校庭に櫓を立て、櫓をとり囲むように輪を作って回りながら、同じリズムを繰り返し踊るあの光景です。

ご先祖さまなどを供養するためとも言われますが、外出や娯楽の少ない時代には得難い男女の出会いの場でもありました。

歌垣などの習俗の名残を止めていて、盆唄を「口説き」というのはそのためでしょうか。

櫓の上では笛や太鼓を奏で、その音に合わせて盆唄を歌う人たちも躍動的に輝いていました。帰省した親戚達が地域の人々と交流し、子ども達はその賑わいに喜びはしゃぎまわる様子は、日本中にみられた夏の風物詩だったのです。

そのような地域に根ざした盆踊りの中に「はねっこ」と呼ばれる踊りがありました。

棚倉町のヤッチキ踊り

棚倉町の八槻に住む生田目さん（84歳女性）は、小学生の頃那倉（埜町）の薬師の祭りに、いわきから装束を着た踊り子達がきて踊っていたことを覚えていました。屋台が沢山出て、ろうそくが立てられ、人がいっぱい集まってとても賑やかで、それはそれは夢のような光景でした。“ヤッチキヤッチキ”とかけ声をかけながら踊り、「ヤッチキ踊り」と言われていたそうです。夕方3時頃から夜まで踊られるので、生田目さんもその輪に入り大げさに踊ったのだと話してくれました。また、跳ねる事からその動作を見て「はねっこ（跳ねっこ）踊り」と云われるようになったそうです。

棚倉町近津出身の佐藤功二さんによれば、棚倉町八槻の「はねっこ」は昭和50年代には見られたとのこと。びよんびよん跳ねたり足を上げたりして、踊る方向が違ったりするので、普通に踊っている人たちの邪魔になり、高齢の人たちからは嫌われたそうです。盆踊りを踊っていて疲れると、輪から抜け出てその輪が小さくなるため、そんな時や初めの頃になかなか輪が出来ないときなどに、若い人が景気づけに「はねっこ」を踊るのです。スピードが違うので大きな輪には混ざれず、輪の隙間や、櫓と輪の間の空間で踊ることが多かったようです。

また、体力が持たないので、大きな輪の人々が全体で「はねっこ」を踊るのではなく、一部の若者が踊り、子どもが面白がって真似をしました。

しかし、参加の目的はくじ引きの景品目当てということも多く、景品をもらおうとすぐに帰ってしまうなど、だんだんに踊りに混ざらなくなりました。見ている側の人だけが多くなり、若い人が出てこなくなると、やがて八槻での「はねっこ」はもちろん、盆踊りそのものが自然消滅してしまいました。

そのような中、棚倉町の手沢ではつい3年前まで盆踊りが踊られていて、「ワッショイ、ワッショイ」のかけ声とともに「はねっこ」も踊っていたのだそうです。とても残念に思います。

昭和40年代の「はねっこ」踊り

棚倉町に住む衣山武秀さんは現在87歳ですが、昭和40年代に東村（現白河市）の釜子小学校に勤務していました。26～27歳のころに、長伝寺の境内で踊られているのを見えています。当時は「わらび座」の地方公演もあり、前座として地元の若者たちが釜子小学校の屋体で「はねっこ」を踊ることもありました。

衣山さんが聞き取りに協力して下さり、当時、元気よく飛び上がる「はねっこ」は表郷村が盛んで、棚倉からも多くの若者が押しかけたということが分かりました。いま、90代の人たちです。

また、泉崎村の鳥峠にある稻荷神社の境内では「八朔（はっさく）」の日に祭りが行われ、その賑わいは東北本線の郡山～宇都宮間で臨時列車が出るほどだったそうです。

境内では盆踊りがあり「はねっこ」も踊られていたと話してくれたのは、昭和4～5年生まれのやはり90代の方々に、泉崎駅前でも踊られていて「あんまり激しくてえ、疲れっちゃうんだあ」と。

時代も戦後を迎え、開放的な雰囲気広がって、みんながはしゃいでいたようにも思われます。衣山さんはまた、棚倉の盆唄には地名が入っているので、だれもが馴染めるものだったと教えて下さいました。

山本不動尊（棚倉町）がある集落で、いまも踊られているのではとの情報で、取材を試みると、山本の盆踊りは正調であり、太鼓をたたくスピードが速ければ、足をびよんぴょん上げて踊る「はねっこ踊り」になるのだといいます。50～60代の人なら皆踊れるだろうとのことですが、とくに「はねっこ踊り」と呼ばれているわけではなく、普通に盆踊りと呼ばれているとお聞きしました。

今や、幻ともいえる「はねっこ踊り」ですが、戦時中の疎開で棚倉町とご縁が出来た『東京棚倉会』のメンバーの方にも伺いました。やはり、その光景が忘れられない思い

出として強く心に残っているといます。都会からやってきた少年が田舎の民俗に触れ、そのあり様に感動し、いまもその記憶を懐かしんでいます。

はねっこやヤッチキの芸能は、あまり研究されることがなく伝承はほぼ廃れています。昭和 50 年代半ばに草野日出雄氏が調査し『赤井嶽（あかいだけ）薬師と「やっちき」考』を表しています。多くのインタビューからその分流源を追跡しようと試みていることが分かります。

その調査をふまえて郷土史研究家の江尻浩二郎氏が、現在「ヤッチキ・はねっこ」の調査研究に取り組んでいることを知りました。

「ヤッチキ・はねっこ」はどこから来たか、節回しや囃子ことば、その分布についての疑問を追求していますが、即興的な歌の記録は残らず、証言出来そうな高齢者も少なくなって、聞き取り調査の困難さを思い知ります。加えて、はねっこの歌は卑猥な言葉が飛び交っていたこともあり、戦後の性風俗浄化の風潮で徐々に下火になり、途絶えてしまったというのが実情のようで、とても一筋縄ではいきません。それでも、福島県南地方に「はねっこ」の文化圏があることを突き止めて下さり、それは、水郡線沿線であったり、塙町を通る大津（茨城県）街道だったりしており、古殿町・鮫川村・棚倉町・石川町・中島村・矢吹町・白河市・塙町で踊られていたことが分かりました。なかでも石川町野木沢・中島村川原田・白河市東釜子では現在も踊られていることが記されています。

今後は江尻氏の調査成果をお借りして、さらに聞き取り調査を続け「はねっこ」の復活にまで繋げていきたいと考えています。

令和 3 年 2 月

安司弘子
(全国歴史研究会会員)